令和七年度入学試験問題　国　語（五十分）

二月三日　実施

〔注　意〕

一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
二、問題冊子は14ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
四、問題冊子の表紙及（およ）び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督（かんとく）の先生に知らせてください。

受験番号

氏　名

東京女学館中学校

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小さいころ詠子は、音は地面から鳴るものだと思っていた。

雨が降り、雨つぶが地面をたたくと、まるで世界中から雨音が鳴っているような気がした。雪がつもって大地にふたをすると、世界はしんと静まりかえった。だから、世界の音はすべて、地面から生まれているのだと、詠子はそう信じていた。

そして今、詠子は雪を見つめている。

雪は窓の向こうで、とめどなく降り続き、見慣れた景色をどんどんと白く染めていく。

いや、消していく。

昔、詠子の部活の先輩であり、美術部とタロット同好会を兼部していた犬飼先輩が言っていた。油絵を描きなおしたくなった時には、描いた絵の上に白い絵の具をぬって、キャンバスをまっしろにもどすのだ、と。そう考えると雪は、①神さまの油絵を消す、世界の(注1)デリートキーのようだった。

②やさしい粉雪が、音もなく世界を消していく。

音を、消していく、消していく。

消していく、消していく。

そしてやがて、すべてがまっしろになった時――。

詠子は、目を覚ました。

③筋肉がはじけたように体がびくりとして、詠子は飛び起きる。

夢、だったのだ。

こんなにも残暑が厳しい季節に、雪の夢を見るなんて。と、詠子はびっしょりと汗をかいた体であたりを見まわす。そこは、詠子の住むマンションの屋上にある、おじさんの小屋だった。どうやら詠子は、おじさんのお気に入りのソファにすわっているうちに、うたた寝をしてしまっていたらしい。

とてもかんたんにつくられた掘っ立て小屋に、深緑色の扉。④□方□方が下から上まで本で埋めつくされていて、本以外にあ

るものといえば、この大きな革ばりの茶色いソファと、机、そして小さな脚立くらい。おじさんが段ボール箱一箱分、お気に入りの本を持っていったはずなのに、この小屋の本の総量は、少しも減っていないように見えた。

部屋は、詠子が何も知らなかった数か月前と、少しも変わっていないように見えて、ところどころ、失っている。机の上にあった大きなデスクトップパソコンも、プリンターも、おじさんがいつもつかっていた赤ペンも、おじさんが本の上で寝るときにつかっていた毛布も、こまごまとしたおじさんの私物は、もうここにはない。おじさんは昨日、この小屋を去ってしまった。詠子のおじいちゃんとおばあちゃんの家に引っ越して、しかし、今はまた病院に入院している。

詠子がおじさんから、おじさんが未知の脳の難病であることを聞かされたのは、ほんの数週間前のこと。本当は数年前から予兆があり、そのころからおじさんは、人知れず少しずつ病院に通っていた。そして一か月前、詠子がおばあちゃんと一週間イタリアに行っているうちに本格的な検査入院をして、その結果を受け入れた。これまでずっとごまかそうとしていた病状と向き合う決心をして、⑤――それを詠子に打ち明けた。

病名は、まだ知れない。どうやら脳に関する病気であり、全身の筋力が弱っていく病気であることは確認できているものの、既存の病気とは少しずつちがった傾向があるそうで、これまでにない新しい病気である可能性が高いらしい。だからこそおじさんは、これから、入退院をくりかえしながら、いつどうなるかわからない自分の病状と、ともに生きていかなければならない。ただ現状、筋力が弱っていることは確かであるため、エレベーターがつながっていないこの屋上で暮らすことは、今はもうできなかった。

だからおじさんは、今の入院が終わっても、もうこの小屋にはもどってこない。

詠子がくたびれて学校から帰ってきても、キッチンでのんびりカレーをつくっているおじさんにはもう会えない。甘いハニーラテをいれてくれるおじさんにも、カラフルなサンドイッチ・ビュッフェをつくってくれるおじさんにも会えない。おばあちゃんが元気をなくした時に、いっしょに「おばあちゃんのためのおいしいホットスムージー研究会」を開催してくれるおじさんは、もうここには帰ってこない。気持ちを切り替えたくなった時に、コーヒーを片手にこの小屋の深緑色の扉をノックしても、おじさんはもう、詠子のなにも受け止めてはくれない。

おじさんは、もうこの小屋にはもどってこない。

こない、こない、こない。

起きているとその言葉ばかりが頭をたたいて、めまいがした。［　X　］が、「助けて」と［　Y　］に手紙を出そうとしているかのように、涙が上から下へつーっと流れた。

明日から二学期で、もう学校がはじまるというのに、詠子は、⑥「おじさんのいない日常」がはじまることがこわくてしかたなかった。そんなこと言ってもしかたがないとわかっているのに、わかっているからこそ、足がすくんだ。⑦ここから、出たくなくなった。

出れば、おじいちゃんが長年手入れをして育ててきた、屋上庭園に足を踏み入れることになる。そして、その庭園からこの夏、急に植物が少なくなった事実を目の当たりにしなければならなくなる。これからおじさんの入退院のサポートや、日々の生活の介護が必要になることを見こして、おじいちゃんはこの夏、屋上庭園の規模を大幅に縮小した。縮小された庭園はもう、これから大きくなることは、きっとない。

「おじいちゃんも、もう歳だからね」

と、⑧おばあちゃんは先日、庭の縮小の手伝いをしながら、力のない笑みを浮かべていた。

おじいちゃんとおばあちゃん、詠子のお母さんは、詠子よりも少し前の今年の春ごろに、すでにおじさんから、病気について聞かされていたらしい。しかし、この小屋を出なければならなくなるような確信的な診断がくだるまでは詠子には言わないでほしいと、おじさんから口止めされていたそうだ。

どうりで、イタリア旅行に出発する前、おばあちゃんは元気がなかった。おばあちゃんは、ずっと知っていたのだ。でも、詠子はイタリア旅行から帰ってきたあとに聞かされた。「詠子ちゃんには自分から伝えたいから」「イタリア旅行は、楽しい気持ちでいってほしいから」「だからまだ詠子ちゃんには言わないでほしい」と、出発前におばあちゃんにそう伝えていたらしい⑨おじさんのやさしさが、詠子には今、ただくやしくて、腹立たしかった。

そうして詠子は、夜がふけきるギリギリまでずっと小屋にこもり、蒸し暑い部屋にがまんができなくなるくらいまで頭をぼうっとさせると、なんとか自分の部屋にもどって、無理やり眠った。

そして、次の朝、起きると。

詠子は、声を失っていた。

その日の朝、詠子は、げっそりとした顔で制服を着て自室を出て、ダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいたお母さんに、あいさつをしようとした。しかし、いつもどおり、あたり前に声を出そうとしたにもかかわらず、詠子の口からは、なんの音も出なかった。あれ、と、不思議に思ったその気持ちも、声にはならなかった。

そのうちに、のどと胸をおさえながら、口をぱくぱくとさせている詠子にお母さんが気がつき、あわてて駆けよってきた。しかし、そのお母さんに声が出ないことを伝えようとした時もやはり、詠子から声はみじんも出なかった。

始業式は休んだ。

はじめは、真夏にクーラーのないおじさんの小屋にこもっていたから体が混乱しただけだと思った。しかし、いくら休んでも眠っても、詠子の声は全くもどらず、詠子の声が物理的な原因からくるものではないことに、すぐに誰もが気がついた。

イタリアから帰ってきてから、詠子はずっとおじさんの病気のことをうまく受け入れられずにいて、病気の話を聞いて以来、おじさんとはほとんど話していない。おじさんの引っ越しとおじいちゃんの庭園のかたづけは申しわけ程度に手伝ったものの、それ以外は高校受験の勉強を名目に、部屋や図書館にこもっていた。唯一、おじさんに関することで詠子がこの夏、発した言葉は、あの屋上の小屋はこわさないでほしいということだけで、しかし、結局おじさんが提案してくれたクーラーを、つけてほしいとは言えなかった。

詠子はずっと、突然降ってきたこの状況に対して、うまく苦しむことすらできなくて、⑩体の方が音をあげた。そんな自分が、詠子はとてもいやだった。おじさんが、詠子ひとりだけを子ども扱いしたことに腹を立てていたのに、結局、誰よりも子どものように駄々をこねている自分がいやで、許せなかった。しかし、声を出して、ふつうにふるまいたいと、心から思っているというのに、一日たっても三日たっても、詠子に声はもどらず、そのうちに、学校を休みはじめてとうとう一週間がたってしまった。

お母さんは、しばらくゆっくり休みなさいとだけ詠子に伝え、あとは詠子を責めることもなく、ふだんどおりに接してくれた。しかし、そうは言っても、いつまでもこのままでいることなど、詠子にはできなかった。

（久米絵美里「言葉屋⑩　さようであるならば」より）

※出題の都合上、一部、文章を変えたり、省略したところがあります。

（注1）デリートキー……パソコンやワープロなどのキーボードで、入力したデータを削除するためのキー。

問一　――線部①「神さまの油絵」とありますが、これは何をたとえた表現ですか。文中から六字でそのまま抜き出して答えなさい。

問二　――線部②「やさしい粉雪が、音もなく世界を消していく」とありますが、これは雪がどのような様子であることをたとえた表現ですか。十五字以内で「～様子」に続くように答えなさい。

問三　――線部③「夢、だったのだ」とありますが、詠子が見た夢の内容は、現実の詠子に起きた出来事と関連づけられていると考えることもできます。このように考えた場合、夢の内容のどのような点が、今後の詠子のどのようなことを予感させていると考えられますか。このことを説明した、次の文の［A］、［B］に適する語句を指定された字数で答えなさい。

詠子は、音は地面から鳴ると思っており、夢の中で地面が雪によって消されて、［A（十字以内）］ということが、夢から覚めた現実の詠子が［B（五字以内）］ことと結びついていると考えられる。

問四　――線部④「□方□方」の□に適当な漢字を入れて、「あちらこちら」という意味の四字熟語を完成させなさい。

問五　――線部⑤「それ」が指す内容を文中から二十字以内でそのまま抜き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問六　文中の［X］、［Y］に適する語の組み合わせとして、もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　X＝耳　Y＝目　　イ　X＝目　Y＝鼻　　ウ　X＝脳　Y＝心　　エ　X＝体　Y＝心

問七　――線部⑥「『おじさんのいない日常』がはじまることがこわくてしかたなかった」とありますが、詠子が「おじさんのいない日常」をこわがるのはなぜですか。三十字以内で答えなさい。

問八　――線部⑦「ここから、出たくなくなった」とありますが、詠子がこのように思う理由として、小屋の外に屋上庭園があることが述べられています。屋上庭園があると出たくないのはなぜですか。理由としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　屋上庭園はおじさんが入院することで縮小されていて、おじさんがいない現実を実感させられるから。
イ　屋上庭園はおじさんとの思い出の場所であり、それを見るとおじさんがいない寂（さび）しさを感じるから。
ウ　屋上庭園は自分と祖父とで大切に世話をしてきたので、縮小された庭園を見たくなかったから。
エ　縮小された屋上庭園を見ると、おじさんの死を予感させるものに思えてつらくなるから。

問九　――線部⑧「おばあちゃんは先日、庭の縮小の手伝いをしながら、力のない笑みを浮（う）かべていた」とありますが、このときの「おばあちゃん」の気持ちの説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　庭を縮小することを残念に思いつつ、息子の病気がよくなることにかすかな希望を感じて笑みを浮かべている。
イ　庭を縮小したくはないが、しかたがないことと受けいれて、自分の気持ちをごまかすように笑みを浮かべている。
ウ　庭を縮小することで詠子が悲しく思うことがわかっているので、少しでも励ましたいと思って笑みを浮かべている。
エ　庭を縮小することでおじさんの病気に詠子が気づいてしまうことがないようにと考えて笑みを浮かべている。

問十　――線部⑨「おじさんのやさしさが、詠子には今、ただくやしくて、腹立たしかった」とありますが、

（1）「おじさんのやさしさ」とは、具体的にはどのようなことですか。二十字以内で答えなさい。

（2）（1）で答えたことを、詠子が「くやしくて、腹立たし」く思うのはなぜですか。十五字以内で答えなさい。

問十一　――線部⑩「体の方が音をあげた」とありますが、これは具体的にはどのようなことですか。十字以内で答えなさい。

二　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

今の「自分」は、中学時代のかずかずの経験が土台となっている気がします。小学校から中学校へと広い舞台に立った私は、教科書では教わらないことを学びました。

これはK子さんが中学時代の自分を振り返って高校二年の時に書いた文の一節です。このK子さんは、中学時代に全国大会出場をめざす運動部の選手をしながら、生徒会役員となって生徒会活動にも取り組んでいました。生徒会では、通学服の自由化に取り組むなかで、自由を手にすることの大変さと、自由の中には責任が潜んでいることを学びました。一方の運動部では、「上」から言われたとおりに従い枠からはみ出ないことを求められました。事情で部をやめようとする人にはあら探しまでして追及し、練習を休めばたとえ生徒会の仕事であっても責められました。K子さんは「自分の信念とは違う枠に入れられている。自分が自分でなくなっている。」と考え、イジメにあうことも覚悟のうえで心の内を部の仲間に話して退部しました。

その時のことを「親と、力強い協力体制を敷いてくださった先生方を支えに、悩みに悩んだ自分の決断でした。（中略）何が正しい道なのか、よくよく考え、そしていろいろな道を歩み、悩み、苦しむことで自分という人間がつくられていくのだと思います。まさに、その第一歩が私の中学時代でした」と振り返っています。彼女の言う親や教師の「支え」とは、共感しながら話を聞いたことと彼女の決断を応援しサポートする姿勢を示したことだけです。決断し行動したのはあくまでも彼女自身でした。①自分の決断の結果起きるだろうことも予想し、それを引き受ける覚悟もしていたことでしょう。きっと辛いこともあったはずです。でも彼女が言うように、自分でよく考え（自分で決め）て歩んだからこそ困難を乗り越えられ、人生の土台といえるようになったのだと思います。②私も教師の一人としてかかわり、感動を共有させてもらいました。ずいぶん前のことですが、忘れることのできない出来事の一つです。

中学の三年間はドラマがいっぱいの激動の時期です。自分を素直に出せない複雑で変化に富んだ時期、おとなから見ても、生意気で［　A　］に見える時期です。ルソーという一八世紀の教育思想家はこの時期を「第二の誕生」と表現しています。一度目

はお母さんのおなかからオギャーと誕生し、今度は「内なる意志」に基づいて行動を始めます。この一人ひとりの子どもの人生の激動の時期＝第二の誕生に立ち会い一緒に歩くのが〝中学教師〟という仕事です。だから「毎日が同じことの繰り返し」なんてことは決してありません。変化に富んで、刺激的で、おもしろいのです。

ところが、③初対面の人に「中学教師をしています」と言うと、「ステキな仕事でうらやましい」と言われることはほとんどありません。反対に「大変でしょうね」と同情されることはあります。どうしてなのでしょうか。

それは中学時代という時期が、幼児期の言われたとおりに行動してきた自分から、内なる意志に基づいて行動する青年期の自分へと変化する時期にあたることと深く関係しています。

「先生、私今日でいい子やめるの。明日からは自分に正直に生きていくんだ」。小学校を卒業するその日、S子さんは担任の先生にこう言ったそうです。でも、いい子を卒業したS子さんは、その後どんな中学生になったのでしょう。中学教師が毎日向き合うのは、S子さんのように、自分の内なる意志に基づいて一生懸命に考え、悩みながら生きる子どもたちです。ですから、意志を無視して行動をコントロールしようとすれば、たちどころに反発されます。

もし、［　B　］に激しい反発をしなくても、「納得できない」という思いは冷ややかな視線や態度になって現れます。そうした子どもの反応は相手が教師であろうとも容赦はありません。

ア　でも、誰かによってコントロールされ続けた子どもはいったいどんなおとなになっていくのでしょう。

イ　そんな時は、「刺激的でおもしろい」などとは到底思えず、言うとおりにさせられない自分が無力に思えてへこんだり、言うことを聞かない子どもが憎たらしく思えたりしてしまいます。

ウ　第二の誕生に立ち会うということには、しんどさや苦しさがともなうことは確かですが、それ以上の魅力がここにあります。

エ　私はむしろ、「納得できない」という自分の思いを大切にし、その思いと正直に向き合おうとする子どもの姿勢のほうに人間としての力を感じ、そうした子どもたちとかかわることによって、私も人間としてのエネルギーをもらっていると感じています。

オ　中学教師という仕事を「大変でしょうね」と同情してくれるのはそういうことを言っているのかもしれません。

こんな話があります。まだ一時間目が始まったばかりのある日の二年生の教室、一番前の席でA子さんが爆睡しています。先生が「起きなさい」と声をかけました。「そんなに眠たいのなら家に帰って寝てきたら…」。先生のこの言葉で、A子さんはプイッと教室を出てしまいました。

廊下でバッタリ出会って話を聞いてみると、「夜七時から一一時までの塾が週三日あって昨日は塾の日だった。自分は小学校三年生ぐらいから勉強がわからない。今はまったくチンプンカンプンという授業もある。でもみんなに迷惑かけちゃいけないからじっと黙って座っている。昨夜は塾から帰ってご飯を食べて、お風呂に入って、録画した番組を見たら寝たのが二時だった。今猛烈に眠い」とのこと。

「塾の勉強はわかるの?」と聞くと、「あんまりわからないけれどガマンするしかない。小学校の時、怠けちゃったし、私バカだから…」。私はその時、子どもに「自分はバカだ」と思わせてなお教室にしばりつけていることに、教師としての責任を感じました。そして、そんな思いをいっぱいに感じながらも懸命に頑張っているA子さんを心の底からいとおしいと感じました。④爆睡、そして注意されるとプイッと教室を飛び出す、この行動だけをとらえると無礼で自分勝手な中学生の姿が見えてきますが、行動の背景（ワケ）にかかわるといとおしい姿が見えてきます。それは、思春期の自立課題に向き合いつつ苦悩している健気な姿です。中学教師はこのいとおしい子どもの姿と毎日出会っているのです。

最初のほうで登場したK子さんが話してくれた⑤「通学服の自由化」のことをもう少しお話しします。

あの頃、K子さんの通っていた中学校には、子どもの意見を聞いて受け止め、みんなの知恵と力を合わせて学校をつくるという気風がありました。

ある年、生徒会役員選挙を前にして、学校生活についての要望を出し合う意見交換会が実施されました。そこでは三〇近くの意見表明がされました。この中には、文化祭でバンド演奏をしたい、昼休みに体育館で遊びたい、夏服としてポロシャツ着用を認めて欲しいなど、学校側の判断で実現できるもの、市や都、国などが変わらないと実現できないもの、自分たちの努力で実現できるものが混ざっていました。

役員選挙には「〇〇が実現できるように取り組みます」といった政策、今で言うマニフェストが掲げられるようになりました。

「実現する」ための行動とは学校にお願いするという［　C　］なものではありません。「自由」とセットになって付いてくる「責任」も自分たちで引き受ける覚悟を明らかにし、同時にそれが生徒みんなの意志であることを明らかにするものでなくてはなりませんでした。要望のアンケートをとり、集計し、先生たちと意見交換をし…、という粘(ねば)り強い取り組みの結果、昼休みに体育館で遊ぶことができるようになり、夏服としてポロシャツの着用が認められるようになりました。そして、通学服を自分で考えて自由に選べるようにして欲しいという声を上げるようになったのです。

もちろんその結果生じる問題は、先生に解決してもらうというのではなく生徒会が自分たちの問題として考え取り組みました。K子さんの「『自由』の中には『責任』が潜んでいた」という言葉はそういう意味⑥です。生徒が学び生活する学校、その中で変えなくてはいけない不便なことや改善すべき課題は生徒自身が一番よく知っているはず。それを声にしていくのが生徒会です。まだ子どもだからできないなどと決めつけずに、意見表明の場を保障すれば、中学生は学校をよりよい学びと生活の場にする主体者となって大きな力を発揮(はっき)します。こうした子どもの意見表明は、日本も批准(ひじゅん)した「子どもの権利条約」第一二条に明記されている子どもの大切な権利です。中学教師は、一人ひとりの子どもの、こんなにステキな成長ドラマの共演者になることができます。

（汐見稔幸(しおみとしゆき)編『子どもにかかわる仕事』より）

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したところがあります。

問一　――線部①「自分の決断の結果起きるだろうこと」とありますが、K子さんはどんな決断の結果、どんなことが起きることを予想していたでしょうか。次の文の［　Ⅰ　］、［　Ⅱ　］にあてはまる語句を、それぞれ答えなさい。

［　Ⅰ　］という決断の結果、［　Ⅱ　］こと。

問二　――線部②「私も教師の一人としてかかわり、感動を共有させてもらいました」とありますが、筆者がこの時感じた「教師としての感動」の説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　周囲の支えを得ながら自分で問題を解決していったK子さんの姿を見届けられた感動。
イ　何が正しい道なのかを考えぬいて決断するというK子さんの成長の機会に教師として関われた感動。
ウ　後からふり返ると人生の土台ともいえる大切な経験をK子さんがした場面に立ち会えた感動。
エ　自分の道を切り開いていく難しさを、教師としてしっかりとK子さんに教えることができた感動。

問三　文中の［A］～［C］にあてはまる語としてもっとも適当なものを、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　直接的　　イ　消極的　　ウ　現実的　　エ　悲観的　　オ　反抗（はんこう）的

問四　――線部③「初対面の人に『中学教師をしています』と言うと、『ステキな仕事でうらやましい』と言われることはほとんどありません」とありますが、これはなぜですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　いわゆる「いい子」をやめたときから、子どもたちは教師や大人の言うことをきかなくなるとされているから。
イ　自分の意志で行動する生徒をコントロールするのは難しく、教師は生徒の言いなりになってしまうと思われているから。
ウ　「内なる意志」に従って行動する不安定な子どもたちに寄りそうことはできないと思われているから。
エ　小学生のときに大人に従順だった生徒ほど、中学生になると大人を信用することができなくなるとされているから。

問五　文中の［　］の中のア～オを意味が通るように正しく並べかえたとき、はじめから四番目にあたる文を記号で答えなさい。

問六　――線部④「A子さんを心の底からいとおしいと感じました」とありますが、筆者はどのようなA子さんに対して、このように感じたのですか。それが述べられている部分を文中から二十五字以内でそのまま抜(ぬ)き出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問七　――線部⑤「通学服の自由化」を生徒が達成するにあたり、この過程の中で生徒の成長につながったと考えられる取り組みは何ですか。この説明として適当でないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　生徒が主体的に活動に臨み、改革を成功させる道のりの難しさを感じ取ったこと。
イ　マニフェストを実現させるために、多数の生徒の支持を得ていることを示す努力を生徒たちがしたこと。
ウ　問題点の発見からその改善にいたるまで、意見や考えを発信しやすい環境を生徒たちが整えたこと。
エ　生徒アンケートや教師との意見交換を通して、導入しやすいものから取り組むよう生徒が工夫したこと。
オ　生徒が自分たちの可能性を信じ、教師に一切頼(たよ)ることなく、学校生活の環境改善を達成したこと。

問八　――線部⑥「そういう意味」とはどのような意味を指していますか。「～という意味」に続くように、二十五字以内で答えなさい。

問九　文中で述べられている、教師の生徒に対する接し方に共通していることはどのようなことだと考えられますか。本文全体を踏(ふ)まえて、二十字以内で答えなさい。

三　次の短文中の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

1　優勝のショウヒンを受け取る。

2　大学でショウケイ文字を研究する。

3　南からのシオカゼがここちよい。

4　正しい位置をホジする。

5　借金を少しずつヘンサイする。

6　未来では技術カクシンが進むはずだ。

7　長い文章をヨウヤクする。

8　大切なココロガマえを学んだ。

9　外国語のツウヤクの仕事。

10　イタらない点があれば努力します。